
動物属性少女と、封印のドラゴン

聖華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動物属性少女と、封印のドラゴン

【Nコード】

N 8 4 3 3 P

【作者名】

聖華

【あらすじ】

昔か今か未来のこと。あるところには『コトノハ』と呼ばれる大きな世界がありました。ある時、コトノハで悪いドラゴンが暴れまわる事件がありました。住人たちはその力の前になす術はなく、ただただ祈ることしか出来ません。そんな中、空から神様が現れてドラゴンへの対抗策を授けてくれました。さっそく住人たちはドラゴンを封印しましたが、その封印は三百年が経つと消えてしまうものだったのです。

その事件から三百年後。とある森で、神様の対抗策の一つを持つ

少女と封印されていた一匹のドラゴンが出会ったことから、物語は始まります。

『言の葉の森』 企画小説です。

プロローグ ドラゴンの脅威と、神様の力

昔か今か未来のことです。あるところには『コトノハ』と呼ばれる大きな世界がありました。

ある時、コトノハでは強大な力を持つドラゴンが各地で暴れ回り、コトノハの住人の命や生活を脅かしたことがありました。

各地に生きる種族達はなんとかドラゴンを倒そうとしましたが、ドラゴンの力の前には被害を食い止めることすらままなりません。知恵を絞って作戦を出しても返ってくる結果は毎回失敗ばかりで、住人たちは途方に暮れました。抵抗すら出来ないとなつては、何か大きな力が助けしてくれることを祈るしかありません。

そんな時です。住人たちの祈りが通じたのか、青空に突然切れ目が浮かび上がったと思つたら、そこから神様が現れました。

『コトノハに住まう命たちよ、我はこの地で猛威を奮うドラゴンを追つて来た神だ。あやつらは元は我が直々に創造せし生き物。我に従う忠実なる守護者となるはずが、手違いでこの地へと逃げ出してしまったのだ』

その手違いによつて滅びかけている者たちにとっては、とんだ迷惑です。住人たちはあるうことか神様に向かつて、文句を声の限りに叫びました。窮地に陥った住人にとっては、相手が偉かろうと何だろうと関係なかったのです。これには神様も驚いたようでした。

『ふ、ふむ……すまん、これはたしかに我の過ちだ。だが、我はある事情故に直々にあやつらに制裁を与えることは出来ぬ。その代わりに、我が持つ力をお主らに授けよう。この力用いてあやつらを弱らせ、この封印の玉で封印するといい』

住人に力とガラス玉のようなものを渡した神様は『汝らに祝福あれ！』と言い残して、空の切れ目から帰っていきました。少々、情けない神様です。

しかし、経緯は何であれ、この二つが住人たちにとって最後の希望であったことは間違いありませんでした。住人たちは早速この力を使いどうにかドラゴンを弱らせ、各地のドラゴンは次々に封印の玉に封印されていきました。そして、最後に封印が解けないようしつかりと祠が作られたところで、住人たちはようやく平和を堪能できるようになったのでした。

神様からもらった力を持った住人はやがて子供を授かり、力も受け継がれていきました。でも、時が経つ内に誰がどの能力をどの程度受け継いでいるかなんて、全く分からなくなってしまうていました。

もうドラゴンは居なくなったのだから、と住人たちはその事についてさほど気にしなかったのですが、これが後々になって大きな問題となってしまいました。というにも、神様はとても大事なことを住人たちに伝え忘れていたのです。

——封印の玉の効力は三百年経つと消えてしまうのだと言うことを。

1 少女と異変

目を覚ました時、辺りには石で出来た壁がありました。頭も上の方でつかえていますから、ここが屋内だということは間違いないだろう、とぼんやりしている頭でその大きな生き物は考えました。実際そこは封印の間と呼ばれていて、人間などからすれば十分過ぎる広さと、それに見合った天井の高さを誇る場所だったのですが、そんなことを大きな生き物が知っているはずがありません。

大きな生き物は、目をパチクリさせると辺りをゆっくりと見回しました。石壁は文字らしきものにビッシリと覆われていて、不思議な文様が描かれた床は何故か所々焦げています。それ以外は、特に気になるものはないようでした。

意識が先程よりも少し確かなものになると、大きな生き物は自分の前足が何か硬い物を踏んずけていることに気付きました。なんともゆったりした動作で前足を上げて見ると、そこには粉々になった石の欠片が幾らか落ちています。

それは封印の祠と呼ばれるものの残骸で、破片の中にはガラスも混じっていたことなどこの大きな生き物は気付きもしなかったのですがね。

ボタンツ、という大きな音が大きな生き物の真後ろから聞こえてきたのは、それからすぐの事でした。大きな生き物が長い首を伸ばすように振り向くと、開け放たれた木の扉の近くにロープを纏った人間が二人、驚いた様子で立っているではありませんか。そして、人間の手に槍があるのを認めた瞬間、大きな生き物はそれこそふいに目が冴えたように、何故自分がここに居るのか、そこに至るに何があったのかを鮮明に思い出したのでした。

人間の方もこれにはとても驚いていました。なにせ、三百年前に封印された巨悪の一つが何の前触れもなく復活していたのですから、

それも無理はありません。一人は戸惑いつつもこの大きな生き物――ドラゴンが無傷で世に出ず訳には行かないと、その巨体に向けて勢いよく槍を投げました。しかし、決死の一撃も厚い鱗によって阻まれてしまい、ドラゴンは何かが軽く当たったような衝撃しか感じません。

けれども、このドラゴンにとってそれは事を起こすに十分な理由でもありました。

ドラゴンは高らかに、力強く喉を震わて大きく澄み切りながらも、何処か濁った声で吠えました。どこまでも届きそうな咆哮を轟かせると共に、ドラゴンは今まで閉じていた翼を大きく広げ、全身の筋肉に力を込め飛び上がります。このドラゴンにとって石の天井だろうと紙の天井だろうと差ほど違いはありません。どちらにせよドラゴンの行く手を阻むことなど、出来はしないのですから。

いとも簡単に崩れ落ちた天井の残骸を鱗で弾き、ドラゴンは三百年ぶりに大空へと舞い上がったのでした。

森に茂った初々しい葉は、太陽の光を受けて黄緑色をした宝石のように輝いていました。若葉の上に着地しなかった日差しは地面の上に舞い降りていて、薄い影で縁取りをされた魔法の文様のようにも見えます。何処からか、甲高くも心地がいい小鳥のお喋りも聞こえてきました。

そんな風景の中に、地を繰り返し繰り返し蹴る軽快な蹄の音がありました。

少しの黒みを帯びた茶色をした艶のある短い毛に、活気があることが一目で分かるほど生き生きと輝いている小さな瞳。黒々とした長いタテガミと尻尾を勢いよく靡かせて、走るのが楽しくて仕方な

いとはかりに足を動かすそれは、一匹の若い馬でした。

さらに、その背中には馬の尻尾のように纏めた金髪を揺らしながら、いくらか元気過ぎる馬を乗りこなす一人の少女が居ました。しかも驚いたことに、馬には手綱はおろか鞍さえ付いていません。馬は今も倒れていた木に向けて——それこそ家をつばかり飛び越すつもりでいるみたいに——威勢良く跳び上がっているくらいなものですから、もう数十回近く背中から転げ落ちていたとしても可笑しくはない有様です。しかし、少女は寧ろそれを楽しんでいるようで、口元に笑みを浮かべて馬の上で器用にバランスを取り続けていました。

この随分と風変わりな光景はその後もしばらく続けられたのですが、やがて少女は馬の首を軽く叩いて合図をしました。

「よし、この辺りで降ろしてくれるか？」

馬は耳をぴくりと動かして徐々に減速すると、最後に蹄を強く打ち付けてその場に止まりました。少女は跨る時の格好をした足を毛に包まれた背中右側に集めて、そのまま馬から飛び降ります。

「ありがとな。お陰で予定より早く町に着きそうだ」

少女——口調こそ男性のようですが、声は間違いなく年頃の娘のものでした——は感謝の意を込めて馬の首に優しく抱き付きました。動物特有の匂いが鼻をくすぐります。人によっては苦手なこの匂いも少女にとっては慣れ親しんだ、どこことなく安らかになるような心地良い香りでした。

首に回した手を離すと、馬は大きく鼻を鳴らしてその場で地面を二、三度蹴ってみせました。

「ああ、ここで充分だ。たしかにこつから町まではまだ距離はあんだけど、これ以上行ったら帰るの大変だろ？ ……いや、別にお前を見くびってるわけじゃねえって。お前みたいに元気なオスの方がメスにもモテるもんだし。けどな、アタイにも助けられる身としてのプライドってもんがあるんだ。ここはアタイの誇りに免じて、頼むよ。な？」

途中、水でも被ったみたいに顔を震わせた馬に、少女は宥めるように、同時に歳が近い友達に話してでもいるみたいに語りかけた。

すると馬は何回か大きく瞬きをした後に、尻尾をペシッと自分の足に叩きつけてみせました。

「なに、礼を言うのはアタイの方さ。アタイはただ走り回りたいウズウズしてたお前を少しばかり借して欲しいってボスに頼んだだけだからな。……まあ、そう言ってるな。ボスだってお前が嫌いだから掟で縛ってるわけじゃない。それはお前も分かってるだろ？ 群れで暮らす生き物のボスって言うのは、必ず群れの全員に対する責任を負わなきゃなんねえんだ。ボスはその役目をキツチリ果たそうとしているだけさ。まあ、同じような立場としてはその気持ちも分かるけど」

それからしばらくの間も、少女は馬が何かしら仕草を見せるのに合わせ、あたかもその仕草に返答しているように言葉を口にしました。傍から見れば、まるで馬と会話をしているようです。

やがて、馬が力強く嘶くと少女はその首を軽く撫でて言いました。

「分かった。お前も気をつけて帰るんだぞ」

馬は少女の手が離れてしまうと、四本の足を使って器用に方向転

換をします。そして、最後に長い首を後ろの方に向けて少しの間少女を見つめていましたが、まもなく勇ましい足音を響かせて来た道を戻っていきました。

少女はその大きな体が緑の景色の中に消えてしまいうまで手を振っていましたが、やがて自分が進むべき方角へ歩き出しました。もつとも、数歩足を進めると頭上から黒い何かが、それこそ通せんぼでもするみたいに舞い降りてきたので、すぐに歩みを止めなければなりませんでしたけど。

少女の目の前で胸を張りカーカーと笛のような甲高い声で鳴くのは、光沢のある真っ黒な羽を持った猫よりも大きな鳥でした。綺麗に連なった羽を全身に纏った姿は一見すらりとしているようですが、よく目を凝らすと羽毛特有のふつくらとした柔らかさがあるのが分かります。鋭い嘴と爪とは対象的なまんまるの瞳には、聡明そうな光が浮かんでいました。

この鳥が何故少女の目前に現れたのか、それは鳥の主張を聞けば明白なことでした。動物と言うのは人間とは違って声よりも仕草で話をすることが多いものですから、人間の言葉で解釈するのは中々困難なものです。ですが、それでも敢えて人間の言葉にするならば、

『アネツサ。幾ら君とは言え、あんな暴れ馬に乗るなど無謀にも程があるんじゃないか？ しかも、ろくな指示も出さず好き勝手走らせるなんて……経験が浅い若者ほど危険なものも、なかなか居ないんだよ？』

こんな具合でしょうか。多少、細かな意味合い——鳥特有の感覚や感情などは、やはり人間の言葉では言い表せないものなのです——は違っていますが、鳥から注意を受けた少女にはその動物独特のニュアンスが分かっているようですから、さほど問題にはなりません。

なんとも不思議なことですが、この少女は人間には理解出来ないはずの道理を分かった上で動物と会話することが出来たのです。少女——アネッサはやれやれ、と言った感じに肩を竦めると再び歩き始めました。鳥もその後ろを跳ねるように足を動かして、追いかけます。

「そう心配すんなって。群れの一員を借りるって事にどんなに重大なことかは、アタイだって自覚してるしな」

『ボクが言っているのは、そういうことじゃない。君は三百年前の伝説に語られている“神の能力者”の末裔なんだからね。もう少し自分の身を大切にして欲しいというか』

「とは言うけどよ。ジルだってアタイが消極的過ぎる世間知らずなお嬢様だったりしたら、それはそれで問題だろ？ 少し危ないことして、それが大きな経験になるんなら儲け物ってやつだ」

『どうやら君の危ないとボクの危ないは、蜥蜴とワイバーンくらい違うみたいだね……。とにかく、君にはやっぱりそれなりの自覚が必要だよ。ボクら鳥の情報網によれば、封印は既にいつ解けても可笑しくない状態にまでなっているらしいんだから。まあ、それが明日のことなのか数百年後のことなのかは分からないんだけど』

ジルと呼ばれた黒い鳥は軽く羽ばたいてアネッサの前まで来ると、また両足を合わせて飛び跳ねるように進んでいきます。

「ドラゴンか……もし復活したら会ってみたいもんだな。記録には曖昧な記述しかないし、実際はどんな姿をしてるんだろ。きっと、今まで見た全ての動物と何から何まで違うんだろうな」

『自分の使命を憶えていて、そんな呑気なことを言っているなら——』

人間で言うならば、すっかり呆れたというか諦めたというか、と

にかく今にもため息をつきそうな感じでジルが説教を始めようとした時でした。

突然、森に大きな音が響いたのです。まるで近くで体格のいい熊がひっくり返ったような、いや、まるで大規模な土砂崩れでも起こったかのような音。森の中に居たもので、この音が気にならなかったものなど居なかったでしょう。そして、この一人と一羽も例外ではありませんでした。

『ここはまずボクが偵察に行くよ。アネツサはボクが帰ってくるまでここで待ってて』

「了解、了解。じゃあ、さっそく何があったか見に行こうぜ！」

『……君、わざとボクの言葉を聞き間違えてるでしょ？』

「さあな、っと！」

『まったく。もう少し君が大人しかつたら、ボクものんびり羽繕い出来るんだけど……』

ジルの言葉を否定することなく、肩から斜めに下げた鞆を揺らしてアネツサは走り始めました。その後ろには、地面を蹴り飛ばして翼をはためかせるジルの姿があったのは言うまでもありません。

2・少女と出会い

一人と一羽が音源の辺りまで行ってみると、そこには驚くべき光景が広がっていました。

地面は、流れ星が落つこちでもしたみたいに大きく削られていました。周りの木はとても強い衝撃を受けたようで、細いものも太いものも関係なく倒れています。木は全て、窪みを中心に外側に向けて折れていましたから、落ちてきた何かの力を受けたのだと考えるのが妥当です。

アネツサはさっそく——ジルは危険だと言って必死に止めようとしたのですが、健気な説得も好奇心には敵いませんでした——倒れた木々を乗り越えながら、突如森に出現した開けた空間に足を踏み出しました。

地面の傷跡を見ると、それは真上からの力で出来たものではなくて、斜めの方向から地面を引き摺るようにして作られたもののようにでした。さらに、その削り取られた部分の広いことと言ったら、人間が数十人は横になれそうな程です。

普通、こんなものを見れば何かが起こらない内に立ち去るものですが、アネツサは他のことが気にかかって仕方がないようでした。

地面の底には、人間のものであったら既に帰らぬ身になっているであろう量の、少し黒みがかった血がこびり付いていたのです。辺りには息を引き取った生き物の姿は窺えませんが、何か大きな生き物が怪我をしてここに落ちてしまったのでしょうか。

幸いにも地面には、アネツサよりも大きくて前に三本、後ろに一本の指が突き出た足跡がありましたので、その生き物が何処に向かったのかは一目瞭然でした。居ても立っても居られず、アネツサは

走り出します。

ところが、その前をジルが翼を広げて立ち塞がりました。

『アネッサ、もう十分だよね？ さあ、早く帰ろう』

「でも、怪我をしている奴が居るんだぞ！ 放っておけるかよ！」

『それで君に何かあつたら、元も子もないじゃないか！』

「信念を貫く為には多少傷ついても仕方ないって、オーガの奴らは言つてたぞ！ とにかく、アタイは行くからな！」

『あの時は、その考え方のせいで酷い目にあつたじゃないか！ 絶対に先には進ませないからね！』

なんとしてでも進もうとするアネッサの鞆の肩ひもを、ジルは両足でしっかり掴んで後ろへ後ろへと引つ張ろうとします。ところがここはアネッサの方が一枚上手でした。アネッサは体を少しジルの方に向けると、顎の下辺りの羽毛を逆立てるように、中指と人差し指で撫でたのです。

人間同様、動物にとってのくすぐられると弱い所というのも個体ごとに違っているものですが、少なくともジルの弱い部分はそこでした。

ジルは最初こそ翼をバタバタと不恰好に動かしながら、必死にくすぐり攻撃に堪えていたのですが、とうとう足を離してしまいました。

待っていましたとばかりに、アネッサは足跡の方へと駆けていきます。ジルも体勢を整えると慌てて後ろを追いましたが、よっぽどくすぐられるのに弱いのか覚束ない跳び方をしていました。ですから、人間にしたら足が速いアネッサが難なく目的の場所に着いてしまったのは、仕方がないことだったのです。

アネツサが行き着いた先は、大きな口をぽっかり開けた洞窟でした。一見してみれば、蔦の飾りを付けた何処にでもありそうな洞窟なのですが、よく目を凝らしてみると少し変わったところがありました。

辺りの木の背丈と同じ高さをした暗闇の中で、何かがキラキラと輝いているのです。時が少し経つごとに川の流れのように揺れるそれは、妖精の羽から零れた魔法の粉のように美しく神秘的に思えました。

躊躇うこともなく、アネツサはいつもと同じペースで洞窟へと歩み寄りました。

それに呼応するようにして、黒色の中に鮮やかな青が浮かび上がったではありませんか。午前の空の浅縹よりもずっと深く、湖の奥底の群青よりは浅い、穏やかな海のような優しい色をした二つの瞳。その主はしばらくアネツサを見据えていましたが、相手が逃げる気がないことが分かったのでしょうか。ゆっくり立ち上がると入り口の方へ厳かに歩いてきました。

ほがらかな陽光の中に現れたのは、金色の鱗を持つドラゴンでした。鱗は一枚一枚が金貨より大きく、それよりも美しく輝いていて、頭には真珠のように艶やかな角が一對、後ろに向かつて生えています。角の間から肩にまで流れ落ちるふさふさの鬣は金糸のようで、畳まれた翼には蝙蝠のような薄い膜が張られていました。その体つきはアネツサを一飲みに来るような巨体には似合わないほど、しなやかで繊細に見えます。

力強く神秘的な姿の前には、すぐにこの場から立ち去ろうと考えていたジルでさえ、思わずたじろいでしまいました。それほどまでに、ドラゴンからは他の生き物とは全く異なる雰囲気が漂っていたのです。

ところが、アネツサはそんなことなど気にも留めてないようで、臆することなくドラゴンへと近づいていきました。アネツサにとつては、ドラゴンが負っている傷の方がよっぽど心配だったのです。ドラゴンには鱗で覆われていない部分があり、そこから今も真紅の血を流していたのでした。

細長で精悍な顔をしたドラゴンは、軽く口を開き威嚇をしているようでした。口の間からは鍾乳洞より太く鋭い牙が、警告するように顔を覗かせています。

ですが、それでもアネツサは少しも怯まなかったので、ついにドラゴンは大きな声で怒りを吠えてみせました。まるで国中の教会の大鐘が一斉に鳴り響いたような、気品と威圧を備えた咆哮が周囲を駆け巡ります。

ジルはその声に我に返ったようで、自分の身の危険も顧みずアネツサの真横まで飛んでいくと、

『アネツサ！ 今からでもまだ間に合うかもしれない！ ここから逃げよう！』

切実に訴えるジルの制止するように、アネツサは黙って右手を挙げました。

するとジルはそれ以上何かを伝えようとする代わりに、嘴を出された掌に軽く当てました。何の意味がないように見える行動も、一人と一羽には何かしらの意味を持つものだったようです。アネツサの隣に降り立ったジルは、そのまま共に足を進めていくではありませんか。

一人と一羽がとうとうすぐ手前まで来たところで、とうとうドラゴンは本格的な行動に移りました。

大きな右の前足を自分の肩の辺りまで上げると、少しの間の後に

アネツサの真横、ジルが居る場所とは反対側に振り下ろしたのです。鈍い振動と共に、地面に真新しい傷が刻みこまれました。ナイフより鋭く太い爪が、石をも粉々に砕いています。普通の生き物があの一撃を受けたら一溜まりもない、ということは目に見えていました。それでも、アネツサはドラゴンのサファイヤのような瞳を見つめたまま

「大丈夫。アタイは何もしないから、な？」

とびきりの明るい笑顔を浮かべて、優しく語りかけました。ドラゴンの眼と同じ色をした瞳には、真っ直ぐな意思が浮かんでいるようです。

これにはドラゴンの方が面食らったようで、半開きにしていた口を閉じると大きな目をパチクリさせていました。今までの行動が嘘のようなその驚きぶりは、傍から見れば——たとえ、それがドラゴンという脅威の存在だとしても——微笑ましく思えてくる程です。それでも、ドラゴンは諦めてはいないようで、喉を震わせると一つ吠えてみせました。明らかな敵意をしめしながらに麗しい音色の内容は、

『貴方は神より力を授かった者でしょう。そのような方が、何を思つて無防備で立つておられるのです。私たちは敵なのですから、次には私が貴方を踏み潰していても不思議ではないと言うのに』

と、言った具合のものでした。どうやらこのドラゴンは、先程のジルとのやり取りからか否かは分かりませんが、アネツサが普通の人間ではないと判断したようです。

それにこのドラゴンの言うことは、実にもつともなことでした。神の能力は元々ドラゴンを封印する為のものですから、その持ち主とドラゴンが相手の姿を認めた瞬間戦いを始めたとしても何も可笑

しいことはありません。寧ろ、アネツサのような行動に出る方が不自然なのです。

「生憎、アタイに傷だらけのドラゴンに追い討ちをかける趣味はないからな。そもそも、能力も使いこなせないのにドラゴンなんて倒せる訳がないっていうか。お前が今すぐにでも襲い掛かってきたら、多分殺されると思うぞ？」

『……自分の言葉の内容を理解した上で言っておられるのですか？』
「当たり前だろ。今も修行の旅の真っ最中だし、自分の未熟さは一番分かってんよ」

ドラゴンは怪訝そうな顔——と言っても、これはあくまで人間で例えた場合の表現ですが——をして、しばらく黙っていました。脅威となりかねない敵に「自分は弱い」などと言われたら、どんな戦士だって拍子抜けするか激昂するに決まっています。そして、それを自分を油断させる策略だとも、また極自然なことでした。
一方、アネツサの隣で黙りこくっているジルは、内心焦りの気持ちでいっぱいでした。というにも、アネツサが言っているのは全部本当のことで、それをドラゴン相手に暴露することが何を意味するのか分かっていたからです。思わず、この無謀な行動について意見しそうになりましたが、それではアネツサの言葉が正しいことを証明するようなもので何とか堪えました。

『貴方は私を討つ気はないと仰いましたね。では、一体私に何をするおつもりなのですか』

「何って、その怪我の手当てに決まってるだろ？ アタイ、そういうのには結構自信があるんだ。安心して任せてくれよ」

『……最後に聞きましょう。どういう訳があって、そのような気を起こされたのです？』

どうやら、ドラゴンはこの相手には何を言っても無駄だと思ったようです。険しい雰囲気を前面に出しながら、眼を睨みつけるように細めて、言い放ちました。他者を一切寄せ付けたくない、とでも言いたげな様子です。

そんなことを知ってか知らずか、アネッサは何か考えるような仕草をしてみせると、

「訳っていう程のもんでもないけど……アタイを見た時の眼が、やけに寂しそうだったからかな。なんか放っておけない気分になったださ」

ドラゴンは何も返事をせず、しばらくアネッサのことを見つめていました。それから、くるりと背を向けると、洞窟の方へと歩いていきます。

これを了承を受け取ったアネッサと、それを慌てて追いかけるジルも、その後に続きました。

と言っても、ジルは最後の最後まで引き止めるべきか悩んでいたのですがね。

3・少女と食事

暗い洞窟の中は焚き火で照らされ、辺りに転がっている石が不思議な形をした影絵を作っていました。薄暗くて静かな空間には、パチパチと火が爆ぜる音と小さな物音以外、響いていません。

「よし、あとは安静にしているだけだな」

そんな具合でしたので、独り言のようなその呟きすら、やけに大きくはつきりと聞こえました。満足気な笑顔を浮かべ、額についた汗を軽く拭うアネッサの前には、地面に伏せたドラゴンと、その頭の上で身構えるジルの姿があります。

血が流れていた傷口には、今は膏藥が塗られた大きめの布が貼られていました。ドラゴンはそれはそれは大きく、鞆に入った包帯だけではとても布を固定しきれなかったもので、布を貼り付けてしまうことにしたのです。

そもそも、手当てをすること自体とても骨が折れる作業でした。傷口の汚れを洗い流す為に水を汲みに行ったり、布を押し当てて止血をしたり――ドラゴンが手当てをしやすいように渋々ながらも動いてくれていなかったら、きつとお月様が顔を出す頃になっても終わらなかったでしょう。

ちなみにジルが角の間に立っているのは、決してドラゴンに心を開いたからというわけではなく、アネッサのことを少しでも守ろうとした結果でした。変な真似をしたら目玉を突っついてやろう、という訳です。

「おっと、名前を言うのをすっかり忘れてたな。アタイの名前はアネッサ。それで、お前の頭の上に居るのがジル。少し神経質ところ

もあんけど、いい奴だから仲良くしてやってくれよ」

少しでも場を和ませようと言ってみせるアネッサに反して、二匹の雰囲気は依然とピリピリしていました。ドラゴン是不機嫌そうにそっぽを向いていますし、ジルは尾羽をピンツと上に持ち上げていかにも警戒している様子。

アネッサは思わず困ったような笑みを浮かべましたが、すぐに気を取り直します。

「まあ、少しずつ慣れてくれれば、それでいいか。少し早い夕飯にしようと思うんだけど、お前は何を食べるんだ？」

視線を向けられても、ドラゴンは沈黙を決め込んで地面に伏せているだけでした。

外は既にとつても濃い夕暮れの色に染まっていて、少し経てば夜の帳が降りそうです。何処から、巢に帰ろうとしている鳥達の声が聞こえてきます。

アネッサには人よりも動物に関する知識がありました。旅の途中に動物と出会う度に色々とお喋りをして、その暮らしや感覚を聞くのが好きだったので、気がついた時には知識となつて溜まっていたのです。

ですが、そんなアネッサと考えると、相手がドラゴンとなれば話は別です。ドラゴンは今まで見てきたどんな生き物とも違うのですから、本人から話してくれないことには何をしたらいいものか、全く検討が付かないのです。

ところが、アネッサはドラゴンから無理に聞き出そうとすることはなく、ただ夕飯の支度を始めました。

まず、鞆から小さな鍋と森を歩いている途中で見つけた野草、調

味料になる木の実を取り出します。それから鍋にお湯を沸かして、野草を短剣で大まかに切って、木の実を磨り潰したら、材料をお湯の中に入れて少し煮込むと――

「よし。これで完成、つと」

とっても簡素なスープが出来上がりました。アネツサは旅を続けてそこそ経つのもあって、どんな野草なら食べることが出来るのか、またどんな味がするのも大体は分かるのです。

鍋を火から下ろしながら、アネツサは未だにドラゴンの頭上に佇むジルを見上げました。

「なあ、ジル。お前は飯を取りに行かなくていいのか？　いつもはアタイが準備してる間に、魚でも虫でも捕まえてくんのに」

『君をドラゴンなんかと二人きりにはさせられないからね。ボクが帰ってきたら君がこいつの晩ご飯になってた、なんてごめんだよ』

ジルはアネツサの方に一瞬顔をやりましたが、すぐに嘴をドラゴンの方に向け直しました。もつとも当のドラゴンは先程と変わらず、何処かを見やるように視線を逸らしているだけでしたけど。

「別にそいつが肉食だって決まったわけでもないだろ。それに緊張し続けるっていうのも、体に良いことじゃないし」

『仮に肉食じゃなかったとしても、君に危害が及ばないという確証にはならないからね。馬は肉を食べないけれど、あの硬い蹄がついた後ろ足で蹴り上げられでもしてみなよ。普通の人間なら、簡単に死んでしまうじゃないか』

「まあ、たしかにそうだけどさ……」

『しかも、こいつには鋭い牙や爪もあるし、この巨体だって君の命を脅かすには十分だ。君は危険の塊の真ん前に居るのも同じなんだ

よ。ボクとしては、すぐにでも逃げて欲し——」

翼を震わせ足を踏み鳴らすジルは、足元が揺れ動いたところでようやく我に返ったようでした。反射的に飛び上がったドラゴンと距離を取りながらも、自分がした失言を強く後悔します。あれでは、ドラゴンにアネッサが弱いと告げ口しているようなものではありませんか。

幸いなことに、ドラゴンが鎌首をもたげて襲い掛かってくるなんてことはありませんでした。寝ようとしているのか、それとも頭上で騒がれるのが煩わしかったのかは分かりませんが、頭を前足に乗つけるとそのまま目を閉じたただけだったのです。

「大体、飯抜きじゃ幾らジルがアタイを守りたくても、体が着いてきてくれないだろ。木の実も一応採ってきといたから、それが今日の晩飯な」

「……分かったよ」

ドラゴンを睨みつけるように見ていたジルでしたが、アネッサが硬い殻に覆われた木の実を石で割り始めると、その隣まで飛んできました。

その作業が一段落ついてジルが木の実を突つつき始めたところで、アネッサはようやくスープを飲みました。と言っても、お皿の代わりには程よく冷えた鍋を、スプーンの代わりには木製のお玉杓子を使っていましたから、礼節に厳しい人がこの場に居たらお説教をされていたに間違いありません。

食べている途中で、アネッサはがスープを入ったお玉杓子をドラゴンの鼻先に近づけたりもしたのですが、ドラゴンは目を閉じたまままでピクリともしませんでした。

「あのさ、たしかにあいつはドラゴンなんだし警戒するのは分かるけどさ」

鍋を少し傾けて、残りも僅かになったスープを掬いながらアネツサは口を開きました。

「アタイだって色々な動物を見てきたんだ、中には話が一切通じない奴も居るって分かってる」

『つまり、このドラゴンは話を通じるから仲良くしろ、っていうのかい？』

「なんて言ったらいいんだか……とにかく、アタイはこいつも他の動物の時と同じように接したいんだよ。ドラゴンだからで終わらせたくない、付き合うかどうかは自分の眼で見極めたいっていうかなとある人の言葉を借りれば『動物を知る上で大切なのは、相手を恐れる気持ちと常識を捨てて向き合う覚悟だ』ってところ」

そんな風に真剣に語る横顔を見たジルは、これ以上言い争っても埒が開かないと思ったのでしよう。

『ボクはあいつが少しでも変な真似をしたら、君がなんと言おうと容赦しないからね』と言ったきり、そこで話を止めにしました。

さて、アネツサとジルは気付かなかったのですが、ドラゴンは実は眠ったフリをしていただけで、ちゃんと二人の話を聞いていました。途中で思わず眼を開けてしまいそうにはなったものも、それを知られることはありませんでした。

ドラゴンはずっと考え込んでいました。自分よりも遥かに大きく危険な存在にも、全く恐れを抱いていないように接してくるアネツサのことが気にかかっていたのです。

それから、

——『アタイを見た時の眼が、やけに寂しそうだっただけかな。なんか放っておけない気分になってさ』

眼を閉じていたのもあつてか、いつのまにかドラゴンは本当に寝入ってしまった。

ドラゴンが眼を開けたのと同時に、穏やかな日差しが瞳に入ってきました。隣では、大柄な——と言っても、ドラゴンと比べたら二回りくらい小さいのですが——ブチ犬が丸くなって寝息を立てています。犬の毛についている乾いた土の香りが、鼻をくすぐりました。今のドラゴンは大型犬より幾らか大きいくらいの背丈しかありませんでした。顔にもあどけなさが目立ち、大きな真ん丸の瞳は青空の光を受けてキラキラと輝いています。

胸を静かに上下させて時折寝言を呟いていた犬が、ふいに顔を上げて後ろの方を見やりました。悪戯代わりに垂れた耳を裏返してやるのかと考えていたドラゴンも、釣られてそちらに眼を向けます。そこに居たのは、ほとんど白い金髪をした初老の男性でした。すらりとした、けれども弱弱しくはない体つきと、しっかりとした足腰からは肉体的な老いは感じられません。

男性は穏やかで、でも何処かに強さを感じる青い瞳でドラゴンと犬を見つめていました。自分と同じ色をしているのに、全然違ったものに見える双眸。ドラゴンは毎回それをとて不思議に思いましたが、男性に尋ねてみても「君もいつか分かるようになるさ」という答えが笑顔と共に返ってくるだけでした。

「太陽と戯れるのも中々いいものだが、そろそろお茶にしようじゃないか。だがボンゴ、君は先に川で水浴びをしてきた方がいいようだな」

白地の毛を土で汚した犬を見て、男性は怒ることもなくおどけた口調でそう付け足しました。ボンゴと呼ばれた茶ブチの犬はいつも同じことを言われているようで、男性が言い終わらない内に尻尾を振りながら何処かに駆けて行ってしまいました。

一方のドラゴンは男性が「お茶をしよう」と言っのを毎日楽しみにしていましたから、さっと立ち上がると男性の元にとてと歩いていきます。

男性の手が近寄ってきたドラゴンの頭に触れようとした時――

――ドラゴンは、ハッと顔を上げました。洞窟の入り口から見える景色の大半は黒い木の影でしたが、上の方は澄んだような暗いような空色をしているのがしっかりと分かります。太陽はまだ低いところに居るのか、外はほんの少し明るいだけでした。

しばらくの間、ドラゴンは夜更けの景色をぼんやりと眺めていましたが、やがてそこから眼を逸らして洞窟の地面を見回し始めます。お目当ての物はすぐに見つかりました。

長い首を伸ばして近くにあった大きめの石を咥えると、そのまま口の中に入れて、大きな音を立てながら粉々に噛み砕きます。それから、尖った破片も混じっているであろうそれをごっくんと飲み込んでしまいました。

なんと、このドラゴンが主食にしていたのは鉱石だったのです。お腹が空いている時にスーブを鼻の先に差し出されても全く身動き

しなかったのは、お玉杓子が木で出来ていたからでした。

ドラゴンは地面に落ちている石を次から次へと噛み砕いて、飲み込んでいきました。お腹が空っぽだったのもあったのですが、あまりに必死に石を食べ続けるその姿には、それだけではない何か別の理由が隠れているように見えました。

ですから、ドラゴンが違う所にある石を食べようと後ろを振り返るまで背後の人物に気付けなかったのも、不思議なことではありませんでした。

自分の眼がこちらを見つめているアネツサを捕らえた時、ドラゴンは一瞬だけ眼を丸くしました。それから、全く気にしていないという感じを出そうと、すぐに石を食べに戻ります。

「良かった。怪我で飯が取りに行けないんじゃないかって、心配してたんだよ」

親しい人物を遠くに見つけた時のように、アネツサは食事をして
いるドラゴンに歩み寄りました。

「いや、伝説で書かれているドラゴンは人を喰ったりしているからさ。肉食だったら糞の臭いもそれなりに強いはずなのに、ここにそういう臭いがないってことは『飯が食えてない』か『ドラゴンの糞は無臭』かの二択だと思ったんだ。ほら、前者だったらお前の命に関わる問題だろ？ 手当ての時にも一応近くに糞が落ちてねえか探したんだけど、それっぽいもんはなかったから――」

余程そのことを気にしていたのでしょう、不安の栓が取れたアネツサは溢れた感情をそのまま口に出します。その間、ドラゴンは興味がないとばかりに黙々と石を噛み砕いていましたが、内心は驚きでいっぱいでした。

排泄物に目を向けるのは、たしかに動物に対する知識がなければ出来ないことでしょう。ですが、その知識を活用できるかどうかは、持ち主の意思に完全に委ねられています。相手は生半可な気持ちで自分を救おうとしている訳ではない、ということがドラゴンにも分かったのです。

「まっ、無意識に伝説の中のことを前提にしちまったアタイも、まだまだ半人前ってわけだな。ジルにはあんなこと言っというて、まだまだ常識を捨てきれてねえや。分からないことが多い相手について纏めた資料なんて、結局は分かってないとこの方が多い不完全なものなの」

『……貴方は、変わった方なですね。どんな生き物も危険だと報告を受けたものには、そうだと前置きをして接するものでしょうに』
「自分でも、人間だからとか関係なしにすぐに死んで可笑しくないタチだと思う。でもさ、それで後悔したくないって気持ちの方が強いんだよ。ジルには神の力のお陰で周りより余裕があるからだって、だから危険とかに無頓着だからだって言われたけど。まあ、どちらにせよアタイは変わり者だってことだな」

食事を中断し、アネツサの顔をじっと見つめて話すドラゴン。その瞳の中に写り込んだ、おどけた調子で話す自分と同じ青い瞳の少女の姿に、何処となくむず痒い気持ちになりました。

一方のアネツサは、ドラゴンが自分から視線を逸らさない理由をこうだと考えたようでした。

「わりい、わりい。食事風景をずっと見られてちゃ良い気分はしないよな。じゃあ、アタイはもうちょい寝てくる。この辺りの動物に話を聞きに行こうにも、こんな中途半端な時間に話しかけたら迷惑だし」

大きく伸びをしたアネツサは、くるとドラゴンに背を向けると洞窟の奥の方に戻っていきます。

ドラゴンはその後姿をただただ眺めるばかりで、何か話しかけることはありません。

けれど、ドラゴンである自分に感情を包み隠さず話してくれたことには、何かしら思うことがあるようでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8433p/>

動物属性少女と、封印のドラゴン

2011年10月4日18時49分発行